



平成31年3月発行 神戸市広報印刷物登録
平成30年度 第371号-3 広報印刷物規格A-1類



神戸市立御影小学校
創立110周年記念事業実行委員会
東灘区役所

嘉納治五郎

【増補版】

御影が生んだ偉人

道谷 卓



「嘉納治五郎翁生誕地」の碑(御影本町1丁目、菊正宗酒造本社横)

御影が生んだ偉人・嘉納治五郎を顕彰する目的で設置された石碑である。これまで、治五郎の生誕地を示すものがなかったことから、地元の御影地区まちづくり協議会が石碑の建立を企画して設置したもので、高さ約1・4メートル、幅約2メートルで、地元産の御影石を使用している。2018年（平成30）12月20日に、関係者約30人が参列してこの石碑の除幕式が行われた。石碑が設置された場所は、治五郎の生家から約200メートル離れた菊正宗酒造の本社横の敷地内で、治五郎と菊正宗の本嘉納家とは縁戚関係にあたる。

表紙写真：
御影公会堂・嘉納治五郎記念コーナーの柔道着姿の「嘉納治五郎翁像」（著者撮影）

裏表紙写真：

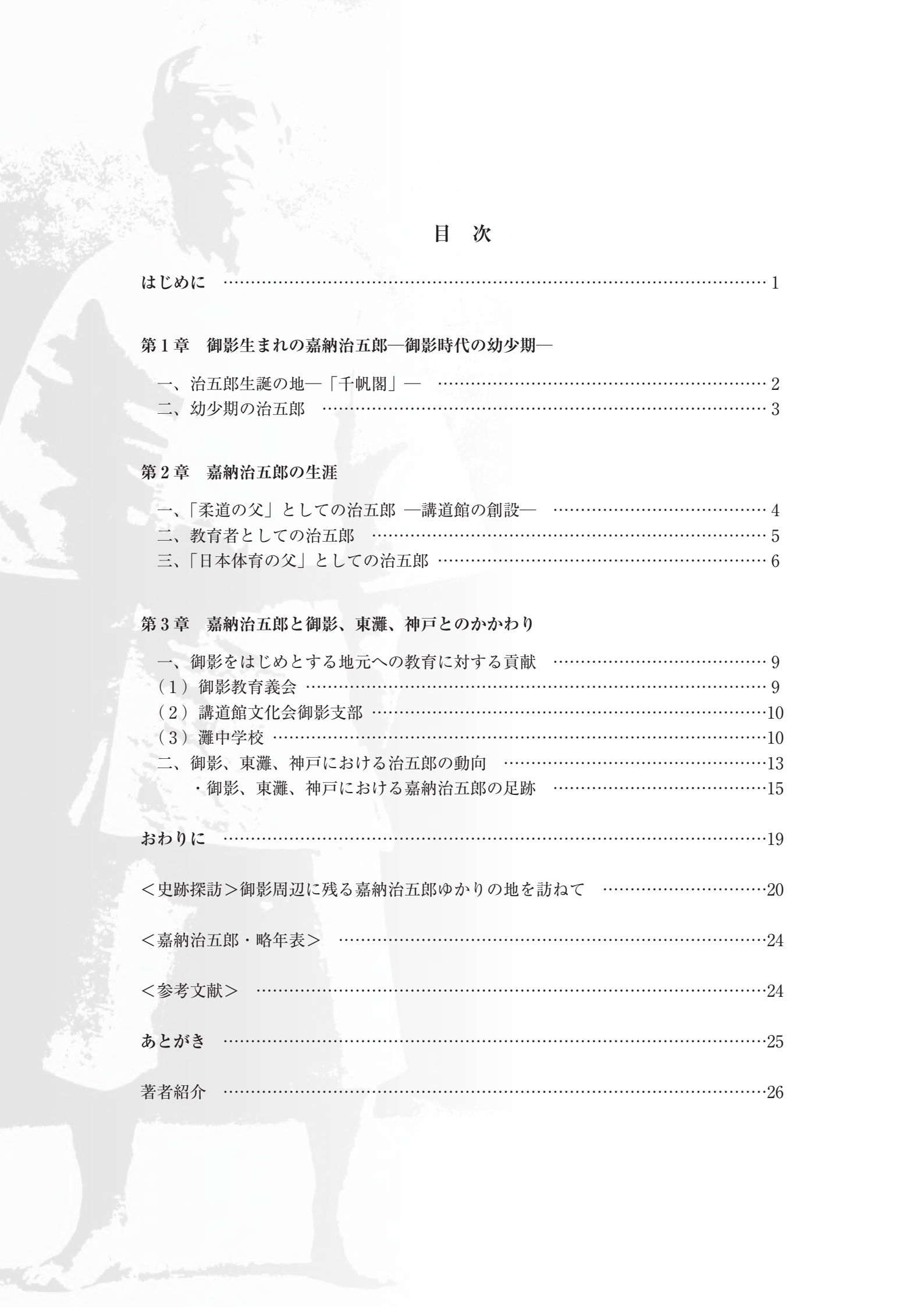
- 中央上 嘉納治五郎直筆「精力善用 自他共栄」（講道館 提供）
- 中央中 自然体（柔道着姿）の嘉納治五郎（講道館 提供）
- 中央下 嘉納治五郎が眞田範衛に贈った書（灘高等学校 提供）
- 左上 筑波大学附属小学校占春園（東京都文京区）の嘉納治五郎像（著者撮影）
- 右上 講道館前（東京都文京区）の嘉納治五郎像（著者撮影）
- 左下 筑波大学内（茨城県つくば市）の嘉納治五郎像（東灘区役所撮影）
- 右下 灘中学校・高等学校内（神戸市東灘区）の嘉納治五郎像（著者撮影）

御影が生んだ偉人・嘉納治五郎

【増補版】

道谷 卓





目次

はじめに	1
第1章 御影生まれの嘉納治五郎—御影時代の幼少期—	
一、治五郎生誕の地—「千帆閣」—	2
二、幼少期の治五郎	3
第2章 嘉納治五郎の生涯	
一、「柔道の父」としての治五郎 —講道館の創設—	4
二、教育者としての治五郎	5
三、「日本体育の父」としての治五郎	6
第3章 嘉納治五郎と御影、東灘、神戸とのかかわり	
一、御影をはじめとする地元への教育に対する貢献	9
（1）御影教育義会	9
（2）講道館文化会御影支部	10
（3）灘中学校	10
二、御影、東灘、神戸における治五郎の動向	13
・御影、東灘、神戸における嘉納治五郎の足跡	15
おわりに	19
<史跡探訪>御影周辺に残る嘉納治五郎ゆかりの地を訪ねて	20
<嘉納治五郎・略年表>	24
<参考文献>	24
あとがき	25
著者紹介	26

はじめに

今年、2018年（平成30）は、神戸市立御影小学校が設立されて110周年という節目の年であり、また、御影が生んだ世界の偉人・嘉納治五郎^{かのうじごろう}の没後80年という年でもある。

御影小学校は、1908年（明治41）4月、御影町立御影尋常小学校^{じんじょう}として設立されて、今年で創立110周年を迎える。御影はかつてから教育熱心な地として知られ、明治時代の中期には、「御影教育義会」という組織がこの地域の教育の発展に大きく寄与していた。実は、この組織の結成に大きく寄与したのが嘉納治五郎で、今、御影小学校をはじめ、御影幼稚園、御影中学校、御影高校と「御影」を冠する学校が半径300メートルの円内にすっぽりおさまり、「文教の地・御影」と称されているそのルーツは、嘉納治五郎にあると言えよう。そして、1938年（昭和13）に79歳で亡くなった嘉納治五郎は、講道館柔道の創設者であり、「柔道の父」とも言われ、柔道を志す者であれば世界のどこに行っても通用する日本人と言っても過言でない。また、日本のオリンピック初参加に尽力し、近代日本のスポーツの礎を築いた人物として「日本の体育の父」とも呼ばれている。

このように、今年、御影にとって、御影小学校創立110周年という年であり、また、御影の教育に大いなる影響を与えた嘉納治五郎の没後80年という年でもある。ちなみに、来年（2019年）のNHK大河ドラマ「いだてん～東京オリンピック噺（ばなし）～」は、日本がはじめてオリンピックに参加した1912年のストックホルム大会から、1964年の東京大会開催までの52年間を描く作品で、その中でドラマ前半の主人公・金栗四三^{くりしぞう}の恩師として役所広司さんが演ずる人物が嘉納治五郎である。そして、この嘉納治五郎が、御影の出身で、この地域の近代教育の基礎を築いたことを知る人はそれほど多くない。そこで、このような節目の年に、本冊子において、御影が生んだ偉人・嘉納治五郎の生涯と御影を中心に東灘や神戸とのつながりを、まとめておきたいと思う。



紋付き姿の嘉納治五郎（講道館 提供）



第1章 御影生まれの嘉納治五郎 —御影時代の幼少期—

一、治五郎生誕の地—「千帆閣」—

嘉納治五郎は、1860年（万延元）10月28日、摂津国菟原郡御影村浜東（兵庫県武庫郡御影町御影字浜東<現在の神戸市東灘区御影本町1丁目>）で、父・治郎作、母・定子の三男（第五子）として誕生する（地図1、2参照。残念ながら、現在、生誕の地には、治五郎が幼少期を過ごした邸宅をはじめ、その名残となるようなものは何も残されていない）。幼名を伸之助と言った。治五郎の生家、嘉納家は、浜東嘉納家と言ひ、酒造業や廻船業を営み、菊正宗で知られる本嘉納家とは縁戚関係にあった（3頁系図参照）。特に、菊正宗の八代目・嘉納治郎右衛門とは同世代で、治五郎が御影を離れた後も、帰省した際は、但馬口（現在の御影中町4丁目、神戸市立御影保育所の場所）にあった治郎右衛門の邸宅をしばしば訪れるなど、仲が良かった。

さて、治五郎が育った浜東の家は御影の浜に面しており、屋敷から紀淡海峡を航行する帆船の帆影が青畳の上に映ったことから「千帆一目」の邸宅と言われ、「千帆閣」とも称された（この邸宅は、祖父・治作が建てたもので、広さは約800坪<約2,700㎡>ある広大なものだった）。この邸宅は、二棟から成り、長屋門のような玄関の正面に二階建ての母屋があり、その母屋と大廊



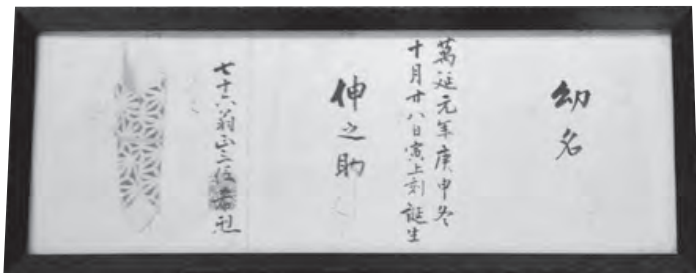
現在の治五郎生誕の地



地図1 嘉納治五郎生誕の地
（「阪神沿道地籍図（西部）」1920年発行より）
（地図1、2の黒塗りが浜東嘉納家の邸宅・千帆閣の場所）



地図2 「東灘区あんない」東灘区役所発行より



「幼名 伸之助」命名の書（講道館 提供）



生家表門（講道館 提供）



「千帆一目」の額（講道館 提供）



生家の庭（講道館 提供）

下で結ばれた客間を中心とした平屋建ての建物があった。邸宅の縁側には、大きな皿の形をした御影石があり、治五郎は、海水をその中にくみ、海で獲った魚をその中で泳がせて遊ばせていた。また、治五郎は、広々とした邸宅の庭で、兄たちとよく相撲をとって遊んでいたという。

二、幼少期の治五郎

治五郎は、この浜東の邸宅で誕生から10歳までの幼少期を過ごすことになる。1863年（文久3）、治五郎が4歳の時、軍艦奉行の勝海舟かつかいしゅうによる和田岬と西宮の砲台築造に父・治郎作が協力することになり、海舟は千帆閣を訪れ、幼い日の治五郎と出会っている。この時、海舟は治五郎を利発そうな子どもだと感じ、これからは学問が重要になるのだからと勉学に励むようアドバイスしたという。また、1865年（慶応元）、治五郎6歳の時には、摂海防備視察に来た老中・小笠原長行おがさわらながみちが千帆閣を訪れ、治五郎は、もみじのような手を行儀良く膝の上に置き老中に謁見したと言われている。



治五郎幼少時代の守り刀（講道館 提供）

幼少期の治五郎は、父が仕事で多忙のためほとんど留守にしていたこともあって、家では、母・定子や兄姉たちと過ごしていた。しかし、多忙な父であったが、治五郎の教育には熱心で、1866年（慶応2）7歳の時から、秋田舟雪しゅうせつと儒者の山本竹雲ちくぐんに、習字と経書の素読を習わせた。このような教えを受け、治五郎は、8歳の時（1867年）に、字を拾い集めて二冊の小さな本を作り、その一冊を『天熹章』てんきしょうと名付けたが、これは、『大学』の天下の「天」と、「朱熹章句」しゅうぎしょうくの一部をあわせたものだという。この時、治五郎は、この二冊の本を使って、親戚の子どもたちに、自分の学んだことを教えている。この頃から、治五郎は、人に物事を教えることに興味を持っていたと思われ、後に教育者として活躍する原点を見出すことができる。

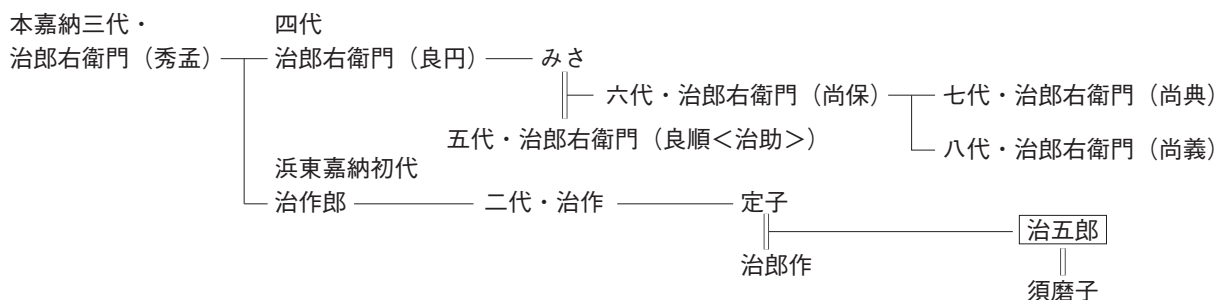


幼少時代の陣羽織（講道館 提供）

幼少期の御影時代は、そのほとんどを母と生活していた治五郎だが、のちに1902年（明治35）頃の手記に「母ガ常ニ他人ノ為ニ自分ヲ忘レテ尽スコトデアル。誰ニカウシテ遣ルトカ彼ニカウシテ遣ラウトカ、誰ガ気ノ毒デアルトカ、ヨク心配シテ居ツタコトヲ覚エテ居ル」と母の思い出を書いており、他人のために尽くすことを母が教えてくれたと述懐している。この母の教えが、教育者として大成する治五郎の基礎を築いたことは言うまでもない。この母も治五郎が10歳の時、1869年（明治2）に病気で亡くなり、これを契機に治五郎は生地を離れ、父に連れられ東京での生活を送ることになる。

幼少期の御影時代は、そのほとんどを母と生活していた治五郎だが、のちに1902年（明治35）頃の手記に「母ガ常ニ他人ノ為ニ自分ヲ忘レテ尽スコトデアル。誰ニカウシテ遣ルトカ彼ニカウシテ遣ラウトカ、誰ガ気ノ毒デアルトカ、ヨク心配シテ居ツタコトヲ覚エテ居ル」と母の思い出を書いており、他人のために尽くすことを母が教えてくれたと述懐している。この母の教えが、教育者として大成する治五郎の基礎を築いたことは言うまでもない。この母も治五郎が10歳の時、1869年（明治2）に病気で亡くなり、これを契機に治五郎は生地を離れ、父に連れられ東京での生活を送ることになる。

（系図）



（本系図は、『本嘉納商店々史』昭和34年、正井達次郎著 395頁以下の年表をもとに作成）



第2章 嘉納治五郎の生涯

一、「柔道の父」としての治五郎—講道館の創設—

治五郎は、母の死去を契機に、父に連れられ居を東京に移し、父とともに^{かきがら}蛸殻町（現在の東京都中央区日本橋蛸殻町）に住んだ。1871年（明治4）7月、治五郎は、自宅の近くにあった生方桂堂の主催する^{せいたつしよじく}成達書塾に通い書道や漢学を学び、また、桂堂が洋学を学ぶよう助言したことから、^{みつくりしゅうへい}箕作秋坪の主催する三又学舎で英書を学ぶようになった。14歳になった1873年（明治6）には、父の下を離れ、^{しばからすもり}芝烏森（現在の東京都港区新橋町）にある育英義塾に入り、そこで寄宿生活を送るとともに、ドイツ人のワッセル達から英語やドイツ語を学んだ。その後、官立外国語学校に入学し英語などを学び、同校を卒業後は、1875年（明治8）16歳の時に、東京帝国大学の前身・官立開成学校に入学した。その後、同校が東京帝国大学と改称されたことで文学部に編入、また、大学に通うかたわら夜間は^{にしょうがくしや}二松學舎の塾生となって漢学を学び、1881年（明治14）、治五郎22歳の時、東京帝国大学文学部政治学・理財学を卒業（文学士）した。卒業後は、同じ文学部の道義学と審美学の専科に進んでいる。

治五郎は、育英義塾に通っていた頃から、自身の身体が虚弱であったことにコンプレックスを感じていたので、非力な者でも強者を負かすことの出来る^{じゅうじゆつ}柔術にあこがれを持ち、学びたいと思っていたが、父の反対にあったためうまくいかなかった。治五郎はあきらめきれず、18歳の時（1877年（明治10））、天神真揚流（平服で行う。絞技、関節技に優れる）福田八之助に入門し柔術を学ぶことになり、その後、起倒流（鎧着用で行う。投技に優れる）飯久保恒年に入門し柔術を学ぶに至った。なお、1879年（明治12）8月には、渋沢栄一の依頼で、来日したグラント・アメリカ前大統領のために、渋沢の飛鳥山別荘（東京都北区西ヶ原）で師の福田八之助とともに柔術の技を披露している。また、1880年（明治13）には、東大の学園祭で天神真揚流の原点になる^{ようしんりゅう}楊心流戸塚一門の演武披露があり、それに飛び入り参加した小柄の治五郎が戸塚一門の巨漢と試合をして勝利したことで、治五郎の名が世間へと知れ渡るきっかけを作っていた。こうした柔術におけるさまざまな経験をもとにして、治五郎はこの柔術の二流派をもとに、柔術では認められていたのどを突いたり、武器を使う危険な技を廃止したりして改良を重ね、東大卒業の年、「柔道」を確立したのであった。この時、治五郎は、相手を倒すことに主眼を置いた柔術から、お互いの力をたたえあう日本から世界へ発信できる新しいスポーツとして「柔道」を提唱しようとしたのである。



自然体（柔道着姿）の嘉納治五郎（講道館 提供）



11歳の治五郎（右側、左側は兄）（講道館 提供）

治五郎は、1882年（明治15）2月に、^{した やきたい なりちよう}下谷北稻荷町16（現・台東区東上野5丁目）の浄土宗・永昌寺に住まいを移し、そこで数人の書生を指導するために「嘉納塾」を開き、塾教育をはじめた。永昌寺では、7畳の書院を治五郎の書齋とし、塾生たちは付属の建物に寄宿することになった。そして、その年の5月、永昌寺の12畳半の部屋を道場に、「講

道館」を創設した。その後、1886年（明治19）に、東京市本町に講道館を創設し、柔道の本拠地とした。1895年（明治28）に、東京市本町に講道館を創設し、柔道の本拠地とした。1895年（明治28）に、東京市本町に講道館を創設し、柔道の本拠地とした。

道館」を創設したのであった。最初の入門者は、富田常次郎であった。現在、この永昌寺の境内には、「講道館柔道発祥之地」の碑が建てられている。

この後、治五郎は、ここ講道館を拠点に、柔道を広めていくわけであるが、その理念となった言葉が彼によって考え出された「精力善用 自他共栄」である。「精力善用」は心身の持つすべての力を最大限に生かして、社会のために善い方向に用いると言う理念で、「自他共栄」は柔道を通して得た相手に対し敬意感謝することで信頼し合い助け合う心を育み自分だけでなく他人と共に栄えある世の中にしようという理念で、この二つは治五郎の進むべき道を示したものと見える。

講道館は、その後、南神保町、上二番町、富士見町、本郷真砂町、下富坂など千代田区や文京区の都内の各地を移転し、1958年（昭和33）に現在の文京区春日に移り、現在に至っている。

一方、治五郎は、柔道そのものを国民に広く理解してもらおうと、1922年（大正11）1月1日、講道館文化会を設立した。この会を母体に、雑誌の発行や講演などを行うことで、「柔道」とその理念である「精力善用 自他共栄」の普及を図っていったのである。なお、文化会を設立したこの年の2月、治五郎は、貴族院議員に勅撰されている。



現在の永昌寺本堂



「講道館柔道発祥之地」の碑（永昌寺境内）

嘉納治五郎直筆
「自他共栄」
(講道館 提供)嘉納治五郎直筆
「精力善用」
(講道館 提供)

二、教育者としての治五郎

治五郎は教育者としても顕著な功績を残している。ここでは、教育者としての治五郎の足跡をたどることとする。講道館を創設した1882年（明治15）1月に、東京帝国大学専科生のまま、学習院の講師となり政治学の教鞭をとったことが教育者としての第一歩である（前述のように、翌2月には嘉納塾を創設している）。さらに、この年の3月、英語学校の「弘文館」を南神保町に開設している。なお、1886年（明治19）に、治五郎は学習院の教頭に昇任している。



22歳の嘉納治五郎（講道館 提供）

1889年（明治22）9月から1891年（明治24）1月までの約1年4か月の行程で、治五郎は、政府から欧州の視察を命じられ、フランス、ドイツ、オランダ、オーストリア、イギリスなどを訪問し、特に教育制度の視察を中心に海外での見聞を広めて帰国する。治五郎は、この時の渡欧日誌を英文で書いており、英語に堪能であるということは、当時、多くの人の知るところであった。治五郎が、国際人としての一面を持ち合わせている証でもある。ところで、この欧州視察からの帰りの船上で、治五郎は、体格の大きなロシアの士官を柔道で投げ飛ばすことになり、このことが新聞を通して全国へと報じられ、彼の名をさらに広めていくこととなった。

帰国後、治五郎は、1891年（明治24）4月に文部省参事官に任命される。この頃、治五郎は、勝海舟を通じて漢学者の竹添進一郎と出会い、これがきっかけとなり、進一郎の次女・須磨子と同年8月7日に結婚することとなった。そして、結婚後すぐ、8月13日に第五高等中学校校長兼文部省参事官に任命され、妻を新居に残し、単身熊本に赴任する。

治五郎が熊本の五高校長の時、柔道が世界へと知れわたるきっか

けができるのであった。校長として、治五郎は、英語教師にラフカディオ・ハーン、すなわち小泉八雲を招聘した。松江から熊本に來た八雲は、治五郎の柔道に興味を持ち、そのことを著書『東の国から』（1895年、"Out of the East"）に書き記し、この本を通して欧米に柔道が紹介されたのであった。この柔道の世界進出は、のちに治五郎を、世界の舞台へと送り出すきっかけを作っていく。

1893年（明治26）1月、治五郎は五高校長を免ぜられ、文部省参事官兼文部大臣官房図書館長となり、翌2月10日に熊本を離れ、東京に戻ることに成り牛込砂土原町（新宿区市谷砂土原町）に居を構えることとなった。そして、6月19日に第一高等中学校長になり、9月20日に東京高等師範学校（後の東京文科大学、東京教育大学、現在の筑波大学）の校長に就任することになった。治五郎は、その後、同校の校長を三期計23年余りの長きに渡って務めることになる。この間、治五郎は、中等教員養成のカリキュラムの策定に大きく関わり、そのモデルを構築していった。

1902年（明治35）7月、治五郎は故郷・神戸から中国（清国）に向け出帆、中国の視察へと向かった。治五郎の名声は中国でも知られ、張之洞と面談して教育を中心とした友好を確認した。治五郎は、すでに留学生受け入れの教育施設として宏文学院（1902年1月開設）を設置していたが、帰国後、張との約束を果たすため、中国からの留学生の受け入れをさらに積極的に進めていった。そして、留学生教育にも、柔道を取り入れたことは言うまでもない。

東京高等師範学校や数多くの功績をたたえ、有志が朝倉文夫（日本芸術院会員）に依頼して寿像を作成し、治五郎の喜寿の年、1936年（昭和11）11月28日に、東京文科大学（文京区大塚）の本館前に設置された。この像は、太平洋戦争の際に供出され失われてしまったが、戦後、原型が残っていたことから、1958年（昭和33）に2基復元され、一つは、もとの東京文科大学の跡地である筑波大学附属小学校占春園に、もう一つは講道館新館の玄関に置かれることになった。



筑波大学附属小学校占春園（東京都文京区）の嘉納治五郎像



講道館前（東京都文京区）の嘉納治五郎像

三、「日本体育の父」としての治五郎

治五郎は、「日本体育の父」と呼ばれるように、柔道をその基盤に置きながら、日本の近代スポーツにも多大なる貢献をしている。先に述べた小泉八雲による柔道の欧米への紹介は、治五郎を、世界の舞台へ



ストックホルムオリンピック開会式の日本選手団（左端が治五郎）（講道館 提供）

と送り出すきっかけを作って行き、その後、柔道は欧米でも広く認知されるようになり、創設者の治五郎の名前も、知れ渡るようになっていった。こうしたことから、1909年（明治42）、ゼラール駐日フランス大使を介し、近代オリンピックの創設者・クーベルタン男爵から東洋初の国際オリンピック委員会（IOC）の委員への就任要請があった。男爵は、この時すでに講道館柔道の評判を聞いており、治五郎にとっても興味を持っていた。男爵から治五郎へあてた手紙には、西洋と東洋が手を結んでオリンピックを行うことで、世界の平和が実現できるという趣旨のことが書かれており、平和主義者でもある治五郎はそれを読んで感銘を受け、IOC委員を引き受

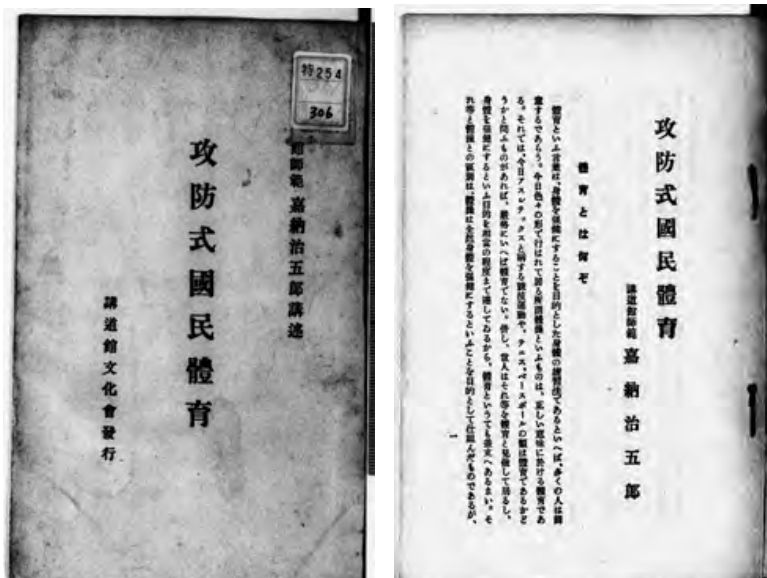
けることにした。

これを契機に、委員就任の翌年、男爵から治五郎は、1912年（大正元）開催のストックホルムオリンピックに日本が参加してほしい旨の要請を受けるのであった。この時、男爵は、治五郎に対して、IOC加盟国は全国的なスポーツ統括団体を持っていて、それが各国のオリンピック委員会（NOC）になっているので、日本も早急にそのような組織を作ってほしいと助言した。治五郎はこれを受けて、NOCに相当する団体を作ろうと動き出し、1911年（明治44）大日本体育協会を設立し、初代の会長に就任している。そして、1912年に開催されたオリンピックの第5回ストックホルム大会に、日本は初めて参加し、治五郎は総勢4人の日本選手団の団長になった。この時に出場した選手の一人が、治五郎の東京高等師範での教え子、マラソンの金栗四三であった。その後、治五郎は、存命中に開催されたベルリン（1916年）、アントワープ（1920年）、パリ（1924年）、アムステルダム（1928年）、ロサンゼルス（1932年）、ベルリン（1936年）のうち、体調不良で欠席したパリ大会を除くすべてのオリンピック大会に臨席している。

このようにIOC委員として世界を視野に入れて活躍する治五郎だが、一方、国内向けにも、国民に対し体育の普及をどのようにすべきかを考えていた。そして、柔道の型を基本にした「^{こうぼうしき}攻防式国民体育」（精力善用体育）を考案し、昭和に入った1925年（昭和元）頃から治五郎自身が全国へと普及活動を行っていった。

「攻防式国民体育」は、1人での単独練習ともいえるパンチやキックを取り入れた投身技の練習と二人が組んで行う相対練習から成っていた。1928年（昭和3）には、講道館文化会から治五郎講述の「攻防式国民体育」の冊子を出版し、これを用いながら、各地を訪問して、攻防式国民体育の普及に努めた。なお、攻防式国民体育の目的は、体育、徳育、武術だとされる。

オリンピックを通して世界の舞台へと降り立った治五郎が、IOC委員として精力を傾けたことが、オリンピックの東京開催であった。治五郎が考えた「精力善用 自他共栄」の理念を広めることが世界の平和につながるという思いで、それを実現するきっかけとしてオリンピックの東京招致に精力を傾けたのである。1932年（昭和7）7月に開催されるオリンピック・ロサンゼルス大会に臨席した治五郎は、7月27日にIOCのラツール委員長と会談し、1940年の第12回大会を東京で開催したい旨を進言した。そして、翌日から開かれたIOCの委員会の席上で、治五郎は、12回大会東京招致の件について勧誘のための演説を行った。その後、1933年（昭和8）ウィーン、1934年（昭和9）アテネで開かれたIOC総会の席で治五郎は、オリンピック東京招致とその意義を説いていった。しかし、この時、イタリアのローマも開催に意欲的で、東京の前に大きく立ち



「攻防式国民体育」（嘉納治五郎講述 講道館文化会発行）

だかっていた。治五郎は、駐イタリア大使たちに、ローマの撤退をムッソリーニ首相と交渉するよう命じ、これが功を奏し、1936年（昭和11）7月に開催されたベルリンでのIOC総会で、ローマはオリンピック招致断念を宣言した。しかし、IOC委員の中から、日本はヨーロッパからあまりにも遠すぎて旅費もかかりすぎると批判されることになった。これに対し、治五郎は、東京開催の必要性を、オリンピックの真の国際化にあるとの信念のもとに演説を行い、説得に当たった。結局、もう一つの候補地であるフィンランドのヘルシンキとの間で、決選投票が行われることになり、36票対27票で、東京はヘルシンキに勝ったのである。

オリンピックの東京開催は決まったものの、日本を取り巻く世界情勢の激変、とりわけ日中関係悪化の詳細がヨーロッパへ伝えられると、交戦国である日本でのオリンピック開催に批判的な国（イギリスなど）が出てくるようになった。治五郎はこうした批判に対して、平和主義を貫く立場からスポーツと政治は別、オリンピックと戦争は別であると主張し説得に当たり、アメリカは終始日本のこの姿勢に理解を示した。こうした中、東京開催については、1938年（昭和13）3月10日に開催されるカイロでのIOC総会で最終確認が行われることになった。会議の席上、治五郎は再度、オリンピック東京開催の重要性を熱弁した。治五郎の演説の成果も加わり、白熱した議論の結果、東京開催が再確認されたのである。3月20日に、治五郎は、カイロ放送局からラジオを通じて日本に向け、東京開催の決定の成果を伝えたのであった。

この後、治五郎は、ギリシアに行き、前年に亡くなったクーベルタン男爵の慰霊式に参列、そのあと、アメリカへと向かった。アメリカを訪れたのは、カイロの総会で日本を支持してくれた同国のIOC委員たちに感謝を示すためであった。このように、教育者、「柔道の父」、「日本体育の父」として活躍した治五郎であったが、アメリカからカナダのバンクーバーへと渡りそこから4月23日に日本郵船の氷川丸に乗船し、帰国の途についた。しばらくすると、治五郎は船内で風邪気味となり、肺炎を発症し、1938年（昭和13）5月4日、太平洋上の氷川丸の船上で帰らぬ人となった（享年79歳）。遺体の帰国後、5月9日、講道館において神式の葬儀が営まれ、亡骸は、千葉県松戸市の八柱霊園に埋葬された。なお、招致に成功した東京オリンピックは、治五郎が亡くなって2か月後の7月15日に、日本政府が閣議で開催権を正式に返上することになり、1940年東京オリンピックは幻の大会となった。



紋付き姿の嘉納治五郎（講道館 提供）



嘉納治五郎墓所（千葉県松戸市の八柱霊園内）



第3章 嘉納治五郎と御影、東灘、神戸とのかかわり

一、御影をはじめとする地元への教育に対する貢献

「柔道の父」、「日本体育の父」と言われる治五郎であるが、実は、彼は、御影を中心に東灘地域の近代教育の基礎を築いた人物でもある。ここでは、治五郎と御影、東灘とのつながりを、地域への教育に対する貢献という観点からまとめておくことにする。

(1) 御影教育義会

普段は東京に住まいを構える治五郎であったが、生まれ故郷の御影をはじめ東灘から神戸市全域に範囲を広げてみると、旅行や出張と称して、頻繁にこの地を訪れていることがわかる。とりわけ、治五郎の本家筋にあたる菊正宗の本嘉納八代目・嘉納治郎右衛門（1853～1935）は同世代であったことから、親交があつく、しばしば、御影の治郎右衛門の邸宅を訪れている。治郎右衛門の邸宅は、旧御影町御影字但馬口（現在の御影中町4丁目、神戸市立御影保育所の場所）にあり、1911年（明治44）から彼はここに住んでいた。治郎右衛門は、本嘉納（菊正宗）の8代目であるとともに、第2代御影町長（1889～1890年在職）として町政に尽力した。現在、邸宅跡は、神戸市立御影保育所となっているが、その園庭の一角に、邸宅時代の灯籠や庭石などが保存され、1952年（昭和27）に建てられた「秋香翁頌徳碑」（「秋香」は、治郎右衛門の雅号）が残されている。

実は、この治五郎の治郎右衛門宅（なお、この時の本宅は但馬口ではなく、現在の菊正宗本社<御影本町1>近くにあった）への訪問がきっかけで、御影を文教の地へと発展させる基礎を築いた組織が考案されている。それは、「御影教育義会」という組織で、1892年（明治25）3月27日に、治郎右衛門らを生起人として設立されている。治郎右衛門をはじめ地元の有志は、かねてから、御影町に教育を普及させるためにはどうすべきかを熟慮していた。同年2月26日に、文部省参事官であった治五郎が治郎右衛門を訪問した際に、治郎右衛門たちは治五郎を囲んで懇話会を開き、教育普及のためにどうすべきかを相談し、治五郎はその場で自らの教育理念を語り、普及のための組織を作るべきであると話した。この時に治五郎が語った教育理念をもとに、治郎右衛門らが設立趣旨書を作成し、これにより設立されたのが「御影教育義会」であり、いわば、この組織は、治五郎発案の組織であった。この会は、歴代会長の多くが現職の町長かその経験者が就任し、御影町教育の普及をはかることを目的とし、尋常小学校



嘉納治郎右衛門邸宅跡（御影保育所内）



「秋香翁頌徳碑」（御影保育所内）



御影幼稚園（1918年（大正7）竣工の園舎）

やそこに通う児童への援助を行い、町民には講演会を開催して教育の重要性を説いていった。この会が行ったことの中で特筆すべきは、治五郎の助言のもと、幼児教育の重要性にかんがみ幼稚園を設立したことがある。これが、1892年（明治25）に開園した御影幼稚園で、開設当初は御影教育義会が運営した私立の幼稚園としてスタートし、5年後の1897年（明治30）に町立に移管している。今、御影地域には、この御影幼稚園をはじめ、御影小学校、御影中学校、御影高校が半径300メートルの円内に立地し、「文教の地」を形成しているというその源流は、この御影教育義会にあると言えよう。

（2）講道館文化会御影支部

1922年（大正11）1月1日に設立された講道館文化会の御影支部が、1925年（大正14）12月25日に設置されている。講道館文化会は、「柔道」とその理念である「精力善用 自他共栄」の普及を図るため、雑誌の発行や講演などを行う団体で、治五郎が組織した会であることは前述の通りである。治五郎は、支部設置の翌年、1926年（大正15）2月7日に挙行された支部発足式に臨席している。

講道館文化会御影支部は、その規約によれば、御影町とその周辺の町村在住者によって組織され、その事業として講演会や機関誌の会員への配布を行うことはもとより、衣食住社交に関して経費節減に努めて質素節約を實踐すべきであるということも決められていた。

また、治五郎の生まれ故郷で結成された支部だけあって、治五郎の思い出も強く、毎年一度、町立御影第二小学校で開催される総会に臨席して講演を行ったのである。とりわけ、この御影第二小学校で、支部発足式のあった翌年、1926年（大正15）4月13日の総会で、治五郎は、自身が発案した「攻防式国民体育」の自らの実演と講演を行っている。なお、御影第二小学校は、1919年（大正8）12月21日に御影町石屋字狭間（現在の御影石町4丁目、兵庫県立御影高等学校の場所）に設置された学校で（1945年（昭和20）11月1日、御影第一国民学校と合併）、現在、御影高校の敷地内に、「御影第二小学校趾」の碑が建てられている。



治五郎が講演した「御影第二小学校」



「御影第二小学校趾」の碑（御影高校内）

（3）灘中学校

治五郎は、東灘に彼の教育理念を実現するための学校の設立に参画している。今や全国的にその名が知られている「灘中学校・灘高等学校」である。灘中学校は、灘五郷の酒造家である菊正宗の本嘉納家、白鶴の白嘉納家、桜正宗の山邑家の三家の篤志を受けて設立された。そのきっかけは、本嘉納の治郎右衛門が奉公人の人材育成を行いたいという思いと、治五郎が治郎右衛門へ語ったこれからの日本を支える人材を作る学校を作りたいという理想がマッチしたことである。さらに、桜正宗代表で元魚崎町長の山邑太三郎が、官公立学校の欠点を補い特色を有する私立学校の設置を熱望、魚崎町の町有地を校地として無償提供するよう町長に申し入れた。こうした酒造家の思いと治五郎の



灘中学校・高等学校正門と講堂の入る本館

教育への思いが開花し、灘中学校設立へと動いていった。そして、両嘉納家、山邑家は、それぞれ、学校建設資金として10万円を出資したのである。

こうした灘中学校設立に関して、治五郎がどのように関わってきたか、時系列で見よう。1926年(大正15)11月21日、山邑太三郎が上京し、講道館で治五郎と面談し、学校設立の思いを述べ、相談したことがその端緒である。翌1927年(昭和2)3月6日、治五郎は、本嘉納の治郎右衛門宅で、魚崎町に新設する学校のことについて協議会を開き、両者がそれぞれ設立予定の学校についての理想を語り合った。この話し合いを受け、早速、治五郎は校長予定者の人選を考え、3月10日に、御影の日高驥三郎(灘中学校初代理事)あてに、初代校長予定者として治五郎の愛弟子である眞田範衛を推薦する旨の書簡を送っている。そして、治五郎は、10月8日に、御影で、両嘉納家や山邑家など関係者と灘中学校の設立にむけ協議をし、翌日の10月9日には、日高驥三郎宅で、校長予定者の眞田らと会い、灘中学に関して協議している。このような動きの中、10月24日に母体である「財団法人灘育英会」設立の認可がおり、本格的に「灘中学校」(旧制)設置に向けての動きが加速化し、翌年4月からの開校が決まった。そして、初代校長には予定者の眞田範衛がそのまま就任し、彼は学校の「教育の方針」を定め、自ら校歌・生徒歌も作詞した。また、治五郎自身もこの時、学校の顧問となり、校是には自ら柔道の精神として唱えた「精力善用 自他共栄」を採り入れた。学校開設の準備が進む中、治五郎は、1928年(昭和3)1月30日に、眞田とともに学校の建築工事の様子を見に行き、翌日の1月31日には関係者と学校開設に関しての協議を行っている。3月2日に、治五



治五郎が日高に送った眞田を推薦する書簡(灘高等学校 提供)



眞田範衛校長(左)と嘉納治五郎顧問(灘高等学校 提供)



灘高等学校応接室にある治五郎が眞田に贈った書の額(灘高等学校 提供)

郎は自ら学校の正門に掲げる「財団法人灘育英会 灘中学校」の門標^{きこう}を揮毫した。

こうした準備を経て、1928年（昭和3）4月1日、灘中学校が開校し、治五郎は4月9日に举行された開校・入学式に参列し、講演している。また、入学式の前々日と前日（4月7日、8日）には、教員を集めて教育上に関する希望を講話し、体育教員向けに治五郎考案の攻防式国民体育を指導している。さらに、5月15日には、講堂と道場正面に掲げる「精力善用」「自他共栄」の額を二面揮毫している。

治五郎は、1928年7月アムステルダムで開かれた第9回オリンピック大会に臨席し、その後ヨーロッパを歴訪して、9月25日に帰国するのだが、その日に、灘中学校を訪れ、教職員や生徒に対して、オリンピック参加の様子や欧州旅行の感想について講演している。また、1930年（昭和5）には、講道館文化会の灘中学校分団を結成することになったことから、4月18日に分団の設立式に臨席して講演を行っている。そして、1933年（昭和8）3月1日、灘中学校の第1回卒業式に臨席し、145名の卒業生に対し講話を行っている。

このように治五郎は、自らの理想の教育を実現しようと設置した学校に対する思い入れは相当強いものがあつたようで、御影方面へ来る際は、頻繁に灘中学校を訪れ、講演等を行っている。

現在、灘中学校・高等学校の校庭には、嘉納治五郎の紋付き袴姿の銅像と「柔道開祖 嘉納治五郎先生 生誕ゆかりの地」の記念碑が建てられている。また、開校当初からある本館（国の登録有形文化財に指定）の2階には、治五郎が生徒たちに講演をした講堂が当時の姿を残して存在し、治五郎が揮毫した「精力善用」「自他共栄」の額が、当時のまま掲げられている。



灘校柔道場にある治五郎直筆の「精力善用 自他共栄」



灘校の講堂にある治五郎直筆・横書「精力善用」
（灘高等学校 提供）



灘校の講堂にある治五郎直筆・横書「自他共栄」
（灘高等学校 提供）



灘高等学校内・嘉納治五郎像と
「柔道開祖 嘉納治五郎先生 生誕ゆかりの地」の碑



治五郎による灘中学校での講演
（灘高等学校 提供）



治五郎が講演した現存する灘校の講堂

二、御影、東灘、神戸における治五郎の動向

治五郎は、出身地である御影に対しては相当な思い入れがあったようで、講道館柔道を普及させようと全国を飛び回る中、ことのほか故郷・御影や、東灘・神戸を訪れる回数が非常に多いことがわかる。講道館に残る資料（『嘉納治五郎体系 第13巻 年譜』（1988年、講道館監修）や、『講道館百三十年沿革史』（2012年、講道館発行）付録のCD版に収録されている「年表編」）からそのことをうかがい知ることができ、とりわけ、治五郎64歳の年・1923年（大正12）以降は、そのことが顕著に見て取れる。

そこで、これらの資料から、治五郎の足跡について御影を中心に東灘や神戸に広げ、特徴的な事柄を中心に系統立ててたどってみることにする。なお、時系列による地元での治五郎の足跡については、本節末に年表形式でまとめておく。

前述の通り、治五郎は、1923年（大正12）以降、頻繁に御影周辺を訪れている。中でも、顕著なものが、1922年（大正11）に設立した講道館文化会を生まれ故郷とその周辺に普及させるための用件で訪れているというものである。1923年（大正12）10月末に兵庫、神戸、御影で文化会普及のための協議を行ったのを皮切りに、1924年（大正13）7月25日には、兵庫県庁において県や神戸市の幹部職員や公立の中学校、高等女学校の校長たちと懇談し、文化会について話し合っている。また、1926年（大正15）6月15日には兵庫県庁を訪問し、山縣治郎知事^{やまがた}と懇談している。このような文化会普及のための故郷訪問により、神戸周辺でも文化会の支部が結成され、なかでも生誕の地・御影には、1925年（大正14）12月25日に講道館文化会御影支部が設置され、翌1926年（大正15）2月7日に举行された支部発足式に治五郎が臨席している。以後、御影第二小学校で毎年開催される御影支部の総会に、治五郎は来賓として出席し講演等を行っているが、なかでも、この年の11月25日に御影第二小学校で行われた支部主催の講演会には御影町の町民を中心に400人以上の聴衆者が治五郎の話に耳を傾けた。また、文化会御影支部の役員会などの会合は御影町役場で開かれており、これにも治五郎は出席している。このほか、神戸市湊区での支部立ち上げのため、1927年（昭和2）6月19日現地で話し合いを持っている。湊支部では、その後、1929年（昭和4）9月22日に治五郎と支部長が懇談をし、また、11月14日には、湊山小学校で母姉会の講演、同じ日に荒田小学校において湊支部荒田支所^{そうせつ}湊雪支所連合大会での講演をしているなど、治五郎と文化会湊支部との関係は深い。

次に、灘中学校に関係する訪問である。1926年（大正15）11月21日の山邑太郎が上京し治五郎と面談したことを皮切りに、翌1927年（昭和2）3月6日、治五郎が本嘉納の治郎右衛門宅で新設する学校について協議を開いて以降、灘中学校を目的とした訪問を数多く行っている。これらの経緯については、すでに述べたのでここでは省略する。なお、灘中学校以外にも、中学校関係では、1929年（昭和4）9月23日に、当時は王子公園にあった関西学院で講演を行ったり、1933年（昭和8）3月3日に行われた板宿の滝川中学校の卒業式に来賓として出席して卒業生に対し講話を行っている。

また、治五郎は神戸高等工業学校の廣田精一校長とは懇意にしており、廣田が講道館を訪れて文化会設立を相談したり、また、1926年（大正15）6月12日に廣田校長の要請で西代にあった同校で行われた講

道館柔道についての講演を皮切りに、何度となく同校において講演や授業参観等を行っている。さらに、生まれ故郷・御影に



治五郎が講演した「御影町役場」



「旧御影町役場跡」の碑（浜御影保育所内）



治五郎が講演した「神戸高等工業学校西代校舎」



治五郎が講演した「御影師範学校」

ある御影師範学校でも、1928年（昭和3）5月19日に、創立50周年記念講演会で講演を行ったり、翌年には同校の同窓会で「普通教育における体育」という演題で講演を行っている。

さらに、治五郎が考案した「攻防式国民体育」を普及させるため、1926年（大正15・昭和元）以降、前述の神戸高等工業学校や御影周辺で、自ら指導にあたっている。御影地域においては、1927年（昭和2）4月13日、14日と連日、御影第二小学校において



治五郎が講演した「御影第一小学校」

て攻防式国民体育の説明と指導を行い、1929年（昭和4）9月18日には、御影第一小学校で開催された攻防式国民体育講習会の発会式に臨席、19日、20日と3日間連続で、同小学校において講演と指導を行っている。さらに、灘中学校においても、攻防式国民体育の指導と講演を行っている。

そのほか、英語に堪能な国際人らしく治五郎は、1924年（大正13）12月1日に神戸外国人居留地54番地に店を構えるイギリスのサミュエル商会の神戸支店長・アイザックと、神戸における外国人への柔道指導について会談している（なお、アイザックは、講道館柔道初段であった）。また、花隈の神港俱樂部で、1924年（大正13）11月5日に会合をもったのを皮切りに、その後、同俱樂部において講演等を行っている。演題が記録として残っている講演では、1927年（昭和2）11月21日に神戸三菱造船所で行われた「講道館柔道と我が国民の向上発展」という演題での講演と、1934（昭和9）1月17日に魚崎小学校で行われた「生活の指導原理」と題する講演がある。そのほか、要人との面談では、兵庫津の神田兵右衛門、国道2号住吉川北に大邸宅を構えていた日立財閥総帥の久原房之介、勝田銀二郎神戸市長らと会い、懇談している。

最後に、親戚関係では、1925年（大正14）11月26日に行われた神戸にあった谷家の邸宅で行われた同家の評議員会に出席し、それ以降、同評議員会にはしばしば列席して、時には同家に宿泊している。また、但馬口にあった本嘉納八代目の嘉納治郎右衛門の邸宅には、御影に行った際には、必ずと言ってよいほど立ち寄っている。とりわけ、1934年（昭和9）と翌年1935年（昭和10）3月19日に治郎右衛門が亡くなるまでは見舞い等で頻繁に同家を訪ねている。

こうした、御影周辺での治五郎の動向も、公式の記録では、1936年（昭和11）5月1日に神戸へ来たことが故郷訪問の最後となる。当時、鉄道や船での移動が可能とはいえ、今と違い、東京から神戸・御影へ来るのには相当労力を要したにもかかわらず、何度もこの地を訪れているのは、それだけ、生まれ故郷の御影という地にひとかたならぬ愛着を抱いていた証ではないだろうか。

御影、東灘、神戸における嘉納治五郎の足跡

1860 (万延元) 【1歳】	・ 10月28日 摂津国菟原郡御影村浜東で誕生
1863 (文久3) 【4歳】	・ 軍艦奉行 勝海舟と自宅で会う
1865 (慶応元) 【6歳】	・ 老中 小笠原長行と自宅で謁見
1892 (明治25) 【33歳】	・ 2/26 嘉納治郎右衛門宅で懇話会を開き、教育普及のためにどうすべきかを相談し、「御影教育義会」の設立を助言する
1902 (明治35) 【43歳】	・ 7/23 神戸から清国へ向け出帆
1922 (大正11) 【63歳】	・ 11/11 神戸から台湾へ向け出帆
1923 (大正12) 【64歳】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4/8 神戸有段者会員安国幸左衛門宅で神戸有段者会について協議 ・ 4/27 神戸へ ・ 10月末 神戸、兵庫、御影等で、有段者会、文化会の用件を済ます ・ 11/25 神戸着、武道殿における兵庫有段者会大会に臨席
1924 (大正13) 【65歳】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/1～1/12 神戸へ行き、各方面の人と文化会の要務について協議 ・ 7/20 神戸着、兵庫県知事の委嘱により、20・21・22日の三日間、村上邦夫を助手として柔道に関する講演を行う ・ 7/23 兵庫県有段者会理事安国幸左衛門、弁護士中里法学士、その他の訪問を受け、講道館柔道及び文化会の要務を済ます ・ 7/25 兵庫県庁において、平田産業部長、神戸市助役、県及市教育課長、市社会課長、県社会課嘱託織田文学士等と会合、文化会のことに関し協議する。県立及市立中学校長、高等女学校長、その他有志と会合、文化会に関し歓談する ・ 9/6 神戸における会合に出席 ・ 9/6以降 神戸へ旅行、講演 ・ 11/5 大阪を経て三ノ宮着、数名の有志会会員に迎えられ、神港倶楽部で会合、同夜神戸出発 ・ 12/1 サミュエル商会神戸支店長アイザック氏（講道館初段）らと神戸における外国人柔道指導の件に関して会談 ・ 12/9 神戸を發し、高知へ
1925 (大正14) 【66歳】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/6 和歌山加太を發し、神戸御影等に立ち寄る ・ 5/12～14 神戸及び大阪における集会に出席 ・ 6/21 神戸にて用務 ・ 11/20～21 神戸滞在 ・ 11/29 神戸着大阪へ
1926 (大正15・昭和元) 【67歳】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2/7 御影における講道館文化会御影支部発足式に臨席 ・ 6/12 神戸高等工業学校長の要請で、同校において講道館柔道について講演

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6/15 兵庫県庁に山縣治郎知事を訪問、講道館文化会の事につき懇談 ・ 6/16 神戸市役所に行き要務を済まし、銀行集会所にて永田仁助と面談会食、再び県庁に行き警察部長及教育課長等と面談 ・ 9/24 蓬莱丸で神戸出帆、台湾へ ・ 10/22 廣田精一神戸高等工業学校長が講道館へ来訪、同校における文化会設立の相談を受け協議 ・ 11/21 魚崎町の山邑太三郎が講道館へ来訪、面談 ・ 11/25 御影第二小学校にて文化会御影支部の講演会を開催（聴衆400余名）、神戸泊 ・ 11/26 廣田神戸高等工業学校長と会い、柔道を基本とした国民体育の講習会につき打ち合わせる。谷家の家事評議員会に列席。神戸出発 ・ 12/19 神戸に向かう ・ 12/20 神戸高等工業学校において、修身科の授業を参観、午後に、柴田、田鍋両名を助手に、攻防式国民体育の講習を行う ・ 12/21 神戸高等工業学校において、二回目の講習 ・ 12/22 御影に立ち寄る。午後、神戸高等工業学校において、三回目の講習講習後、同校階上で主たる講習員と懇談 ・ 12/31 天草丸で神戸出帆、沖縄へ
<p>1927（昭和2） 【68歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/15～16 神戸滞在 ・ 3/5 東京を発ち御影へ ・ 3/6 御影・嘉納治郎右衛門宅にて、魚崎町に新設すべき学校のことにつき協議会を開く ・ 4/6 眞田・灘中校長予定者が講道館へ来訪、中学教育方針その他実施施上に関し協議 ・ 4/12 住吉着、待ち合わせた眞田を同伴して、嘉納治郎右衛門宅で開かれた灘中学校の協議会に出席 ・ 4/13 御影第二小学校で、体育につき講演、攻防式国民体育について説明 ・ 4/14 御影第二小学校で、少数の有志に攻防式国民体育を指導。南郷三郎に誘われ、神戸ロータリークラブで来賓として講演。兵庫の神田兵右衛門方にて開かれた琴の緒会に出席 ・ 5/28 御影にて、嘉納治郎右衛門、荒井嘉右衛門両氏と会談 ・ 6/9 御影に至る（～19まで） ・ 6/17 神戸着、谷家評議員会に参列 ・ 6/18 湊区教育会総会で講演。嘉納治郎右衛門宅で要談、一泊 ・ 6/19 湊区講道館文化会支部創立について懇談。武徳殿における講道館紅白勝負に臨席。有段者会の宴会に出席、神戸出発 ・ 10/8 御影で、明年4月開校予定の灘中学校につき関係者と協議 ・ 10/9 御影の日高驥三郎（灘中学校初代理事）宅に、眞田、曾我豊吉（灘中学校設立発起人）等の諸氏と会い、灘中学校に関して協議 ・ 10/24 財団法人灘育英会・灘中学校が設置認可を受け、同校の顧問に就任 ・ 11/20 神戸に至り、武徳殿にて催された講道館紅白勝負に出席 ・ 11/21 神戸三菱造船所で、「講道館柔道と我が国民の向上発展」の演題で講演
<p>1928（昭和3） 【69歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/29 御影町役場で開かれた講道館文化会御影支部役員会に列席。御影第二小学校で、講道館文化会の主義・主張について懇談 ・ 1/30 文化会御影支部役員新居虎太郎と用談。灘中眞田校長予定者の来訪を受け、中学校の建築工事の様子を見に行く。その後、講演を行う ・ 1/31 灘中学校に関し協議 ・ 3/2 灘中学校の門表を揮毫 ・ 3/30 神港倶楽部で、同地方の講道館文化会首脳者と会し協議 ・ 4/7 灘中学校で、教育上に関する希望を述べ、体育教員その他の有志に攻防式国民体育を指導

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 / 8 灘中学校で、体育の教員に攻防式体育の形を指導 ・ 4 / 9 灘中学校の開校・入学式に列席し講演 ・ 5 / 15 灘中学校道場正面に掲げる「精力善用」「自他共栄」の額二面を揮毫 ・ 5 / 16 灘中学校道場の懸物を揮毫 ・ 5 / 19 御影で、御影師範学校創立50周年記念講演会で講演。神戸市主催の神港商業学校の後援会に出席 ・ 5 / 25 神戸を出帆、アジア経由でヨーロッパへ ・ 7 / 28 第9回オリンピック大会（アムステルダム）の開会式に臨席 ・ 9 / 25 帰国直後、御影に寄る。灘中学校で、本学年のはじめより実施した攻防式国民体育練習を見る。その後、職員、生徒に対して、欧州旅行の感想について講演 ・ 12 / 15 神戸、谷家評議員会に列席
<p>1929（昭和4） 【70歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 / 23 御影師範学校同窓会で、普通教育における体育及び徳島の大方針について講演 ・ 2 / 24 講道館文化会御影支部総会で講演 ・ 4 / 24 御影に行き、灘中学校で生徒のために講演 ・ 5 / 21 御影に行く ・ 5 / 22 灘中学校で、柔道・攻防式国民体育の指導・講演、職員を集めて希望を述べる ・ 6 / 25 谷家評議員会列席。文化会湊川支部会員のために講演 ・ 6 / 26 灘中学校で懇談 ・ 9 / 18 御影着（9/24まで）、南郷三郎邸で催された嘉納家同窓会に臨席 御影第一小学校で開かれた攻防式国民体育講習会の発会式に臨み、講演し、実演を指導 ・ 9 / 19 御影第一小学校で挙行された攻防式国民体育の講習会に出席し、講演 ・ 9 / 20 御影第一小学校で、講習員を指導 ・ 9 / 22 文化会湊支部長角谷・谷哲二等の訪問を受け、文化会の事で懇談 眞田灘中学校が訪問、同中に関する協議を済ませ講習会に臨む ・ 9 / 23 関西学院で中等学校連合試合を見学し、簡単な講演を行う ・ 11 / 14 神戸に至る、湊山小学校で催された母姉会で講演。荒田小学校で開かれた講道館文化会湊支部内荒田支所及び湊雪支所連合大会に臨み講演
<p>1930（昭和5） 【71歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 / 15 灘中学校で、攻防式国民体育を見て講演 ・ 4 / 18 灘中学校における講道館文化会灘中学校分団の設立式に臨み講演 ・ 5 / 30 御影方面へ旅行。灘中学校に眞田校長を訪問、文化会について協議する ・ 6 / 23 神戸方面へ旅行。二葉小学校で開催された神戸市教育会総会に臨み講演 ・ 6 / 24 灘中学校を訪問 ・ 6 / 25 神戸に来る ・ 8 / 19 神戸方面へ旅行、久原房之助と面談 ・ 12 / 30 神戸に来る
<p>1931（昭和6） 【72歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 / 15 神戸方面へ旅行、精力善用国民体育（攻防式国民体育）講習会、武徳会大会などに出席 ・ 6 / 17 御影、谷家評議員会に列席 ・ 6 / 30 神戸着 ・ 7 / 28 灘方面へ旅行 ・ 8 / 27 御影町役場で催された講道館文化会御影支部の晩餐会に臨む、御影第二小学校で文化会の主義主張について講演 ・ 10 / 31 神戸方面へ旅行

<p>1932(昭和7) 【73歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/20 御影町役場で講道館文化会御影支部の会合に臨む ・ 2/29 神戸方面へ旅行 ・ 3/20 月末にかけて、神戸・御影方面へ旅行 ・ 4/30 御影町役場で開かれた講道館文化会研究会に臨む ・ 10/30 神戸・御影方面へ旅行 ・ 11/27 神戸・御影方面へ旅行
<p>1933(昭和8) 【74歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/26 講道館文化会灘中学校分団第1回寄合会に出席 ・ 3/1 灘中学校第1回卒業式に臨み訓話 ・ 3/2 講道館文化会灘中学校分団の会合に出席 ・ 3/3 滝川中学校卒業式に臨み講話 ・ 12/11 神戸へ旅行 ・ 12/22 神戸着 ・ 12/23 谷校長らと懇談 ・ 12/24 御影にて、広瀬助太郎と面談
<p>1934(昭和9) 【75歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/16 眞田灘中学校長と晩餐 ・ 1/17 魚崎小学校において「生活の指導原理」と題して講演。午後、灘中学校講道館文化会分団において欧州旅行談 ・ 2/6 灘中学校にて、日高理事・眞田校長らと懇談 ・ 3/1 灘中学校の卒業式に出席 ・ 3/7 御影の嘉納治郎右衛門宅を訪問 ・ 4/1 神戸着。谷家訪問、同所にて湊山小学校長と面談 ・ 4/2 嘉納治郎右衛門宅を訪問、その後、神田兵右衛門とともに神戸市役所にて勝田銀次郎市長と面談 ・ 4/4 神戸・神港倶楽部において講道館文化会有志と会食 ・ 9/3 上海からの帰路、未明、神戸に着く。灘中学校にて昼食後、講演
<p>1935(昭和10) 【76歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1/18 夜、御影に向け出発 ・ 1/19 嘉納治郎右衛門の病気を見舞う。のち、眞田灘中学校長らと面談 ・ 2/5 灘中学校に行き、柔道の授業を見る ・ 2/6 嘉納治郎右衛門の病気を見舞う ・ 3/19 嘉納治郎右衛門逝去のため、同宅に弔問 ・ 6/9 朝、神戸着。親類の法事に出席。午後、兵庫県柔道有段者大会に臨席 ・ 7/20 御影の嘉納治郎右衛門宅に立ち寄り、午後、神戸の親戚谷家宅に泊まる ・ 11/5 神戸及び郷里において親戚・知己と懇談 ・ 12/16 神戸着。午後、親戚・谷家の評議員会に出席 ・ 12/17 嘉納治郎右衛門宅を訪問
<p>1936(昭和11) 【77歳】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4/30 神戸へ向け出発 ・ 5/1 神戸着（公式の記録では、これが最後の地元訪問）

おわりに

御影生まれの嘉納治五郎について、その生涯と御影を中心とした地元とのかかわりを述べてきた。これまで、御影に住む人たちは、嘉納治五郎が御影出身であるということを気に留めてこなかったように思う。日本の歴史上、有名な人物は数多くいる。その中で、世界のどこの国に行っても、その名前が知られている日本人はそれほど多くない。世界に通用するその一人が嘉納治五郎で、柔道を志す人たちは、世界のどこにあってもこの名前を知っている。つまり、嘉納治五郎は、御影が生んだ世界的な偉人なのである。

近年、嘉納治五郎を顕彰しようと、地元では、御影公会堂のリニューアル（2017年（平成29）4月）にあわせ、その地下に「嘉納治五郎記念コーナー」を設置した。治五郎関係の資料を展示するとともに、その中央には、柔道着姿の等身大の治五郎の銅像（表紙写真）が置かれている（国内に5基ある治五郎の銅像<御影公会



御影公会堂



御影公会堂内「嘉納治五郎記念コーナー」

堂と灘高等学校の東灘区内の2基と、残りの3基は、東京都文京区の筑波大学附属小学校占春園と講道館、茨城県つくば市の筑波大学>の中で、他の4基は紋付袴姿であるが、これだけが柔道着姿である。

こうして、地元では嘉納治五郎についての理解が深まろうとしている。また、来年（2019年）のNHK大河ドラマ「いだてん～東京オリンピック噺（ばなし）～」の前半に、役所広司さんが演ずる嘉納治五郎が登場することで、治五郎の名前はより知れ渡ることになるであろう。また、残念ながら今、嘉納治五郎生誕の地にはそれを示す記念碑はなく、どこがその場所かもわからない状態であるが、近々、地元では、生誕の地付近にその記念碑を建てる計画を持っているので、それが早く実現するよう願う次第である。そして、このようなことを通じて、嘉納治五郎という人物について、地元の人々が今以上に興味を示してくれることを期待したい。

（2018年（平成30）12月20日、生誕地の近くに記念碑が完成した<裏表紙参照>。）



筑波大学内（茨城県つくば市）の嘉納治五郎像（東灘区役所撮影）

史 跡 探 訪

御影周辺に残る嘉納治五郎ゆかりの地を訪ねて

* 御影周辺に残る嘉納治五郎に関するゆかりの場所を訪ねる史跡探訪のモデルコースを組んでみた。
史跡マップを手がかりに、嘉納治五郎の足跡をたどってみよう。

①御影公会堂（嘉納治五郎記念コーナー）→ ②御影第二小学校趾の碑（御影高校内、嘉納治五郎がしばしば講演を行った場所）→ ③御影幼稚園（嘉納治五郎発案の御影教育義会が設立）→ ④御影小学校（嘉納治五郎がしばしば講演を行った場所）→ ⑤御影師範学校跡（現在の御影中学校から御影クラッセにかけて広大な敷地を有していた県立の師範学校、同じく講演を行った場所）→ ⑥菊正宗・本嘉納家本宅跡（御影保育所、友人・八代目嘉納治郎右衛門宅、嘉納治五郎がしばしば訪問する）→ ⑦沢ノ井（後醍醐天皇と嘉納家伝説の場所）→ ⑧御影町役場跡（嘉納治五郎がしばしば講演を行った場所）→ ★菊正宗本社 → ⑨嘉納治五郎生誕地 → < 菊正宗酒造記念館 > → ⑩灘中学校・灘高等学校（嘉納治五郎の銅像、生誕ゆかりの地の碑）

解 説

①御影公会堂（19ページ参照）

1933年（昭和8）竣工、当時の御影町の公会堂として利用された。設計は神戸の代表的な建築家・清水栄二によるもので、丸くカーブした隅の窓とその上部の円塔が特徴で、国際建築（インターナショナル・アーキテクト）の流れをくみ、白鶴酒造七代目嘉納治兵衛の寄付（20万円）をもとに、総工費24万414円をかけて建設された。

1945年（昭和20）6月の米軍機による空襲で、外壁を残し地下の一部以外、内部が全焼した。この空襲の様子は、野坂昭如の『火垂るの墓』に「御影第一第二国民学校御影公会堂がこっちへ歩いてきたみたいに近くみえ…」と描かれている。戦後、御影町が神戸市との合併（1950年）後、市によって改修工事を実施し、1953年（昭和28）4月に再開した。

2017年（平成29）4月、耐震工事によるリニューアル工事の完成にあわせ、地下に「嘉納治五郎記念コーナー」を設置し、治五郎関係の資料を展示するとともに、その中央には、柔道着姿の等身大の治五郎の銅像が置かれている。

②御影第二小学校趾の碑（10ページ参照） （兵庫県立御影高等学校内）

御影第二小学校は、1919年（大正8）12月21日に御影町石屋字狭間（現在の御影石町4丁目、兵庫県立御影高等学校の場所）に設置された学校で（1945年（昭和20）11月1日、御影第一国民学校と合併）、現在、御影高校の敷地内に、「御影第二小学校趾」の碑が建てられている。

講道館文化会御影支部が、1925年（大正14）12月25日に設置され、その後、ここ御影第二小学校で御影支部の総会が毎年開催され、治五郎は来賓として出席し講演等を行っている。なかでも、御影第二小学校で、1926年（大正15）4月13日開催の支部総会で、治五郎は、自身が発案した「攻防式国民体育」の自らの実演と講演を行ない、また、11月25日には支部主催の講演会で御影町の町民を中心に400人以上の聴衆者が治五郎の話に耳を傾けた。

③御影幼稚園（9ページ参照）

1892年（明治25）10月に私立御影幼稚園として創立した東灘区内最古の幼稚園で、5年後の1897年（明治30）4月から御影町立となる

創立の母体となった「御影教育義会」が、嘉納治五郎の発案のもと結成された組織で、会の事業項目の中に幼稚園の設立が挙げられていた。

④御影小学校（14ページ参照）

御影小学校は、1908年（明治41）4月1日に御影町立御影尋常小学校として設立された。もともとは、学制公布により、1873年（明治6）に御影小学校、東明小学校が、翌年石谷小学校が設立され、これら三校はその後いくつかの変遷を重ね、結局、1899年（明治32）に兵庫県師範学校が御影町に移轄された際、兵庫県師範学校（のちに御影師範学校に改称）附属小学校となった。この師範学校附属小学校設置で、当時の御影町は義務教育の任を一時免れたが、児童増加のため御影町立の小学校を設置する必要が生じ、そこで、1908年（明治41）に御影尋常小学校を設立することになった。その年から今年でちょうど110年を迎える。

ここ、御影小学校でも、御影第一小学校時代に治五郎は、講演を行っている。

⑤御影師範学校跡（14ページ参照）

現在の御影クラッセから御影中学校にかけて、かつて、御影師範学校があった。

兵庫県師範学校が1899年（明治22）に御影町に新校舎を建設して移転し、1901年（明治34）に、兵庫県御影師範学校と改称された。御影地域の小学校は、前述の通り、御影町立ではなく、この師範学校の附属として発足している。師範学校が御影にあったことも、「文教の地・御影」と呼ばれてきた一因である。

治五郎は、ここ御影師範学校でも講演を行っている。

⑥菊正宗・本嘉納家本宅跡（9ページ参照）
（神戸市立御影保育所内）

旧御影町御影字但馬口（現在の御影中町4丁目付近）の神戸市立御影保育所を含む広大な敷地は、かつて、菊正宗の本嘉納家の本宅のあった場所である。治五郎の本家筋にあたる菊正宗の本嘉納八代目・嘉納治郎右衛門（1853～1935）が、1911年（明治44）からここに住んでおり、同世代であった治五郎は、しばしば、ここを訪れている。現在、邸宅の跡地である御影保育所の園庭の一角に、邸宅時代の灯籠や庭石などが保存され、1952年（昭和27）に建てられた「秋香翁頌徳碑」（「秋香」は、治郎右衛門の雅号）が残されている。

⑦ 沢ノ井

阪神御影駅の高架下に湧いている「御影」の地名の由来に関する神功皇后伝説で知られる泉であるが、嘉納家にまつわる伝説も伝えられている。後醍醐天皇が鎌倉幕府の倒幕運動に敗れ、隠岐島に流されその後、都に帰還するという出来事が起こるが、その際、天皇はここ御影を通過し、沢ノ井のあたりで休息をとったという。その時、地元の酒造家が、沢ノ井の水で酒を醸し出し、天皇に献上したところ、天皇は、その酒をととも気に入り、「嘉^{よる}こんで、納められた」ことから、後に「嘉納」という名を名乗ったというのである。

⑧ 御影町役場跡（13ページ参照）

1924年（大正13）に落成の御影町役場は、清水栄二設計の、近世ドイツ風鉄筋コンクリート2階建ての庁舎で、この建物で治五郎は講演を行った。神戸市合併後は、初代の東灘区役所として利用されたが、1978年（昭和53）に取り壊された。今では、浜御影保育所の庭に役場時代に使っていたカウンターの石を利用して「旧御影町役場跡」の碑が建てられている。また、ここは1950年（昭和25）に御影・住吉・魚崎・本山・本庄の五ヶ町村が神戸市と合併し、「東灘区」が発足した時の最初の区役所が置かれた場所であり、区制50周年を記念した「東灘区役所発祥地の碑」もある。

⑨ 嘉納治五郎生誕地（2ページ参照）

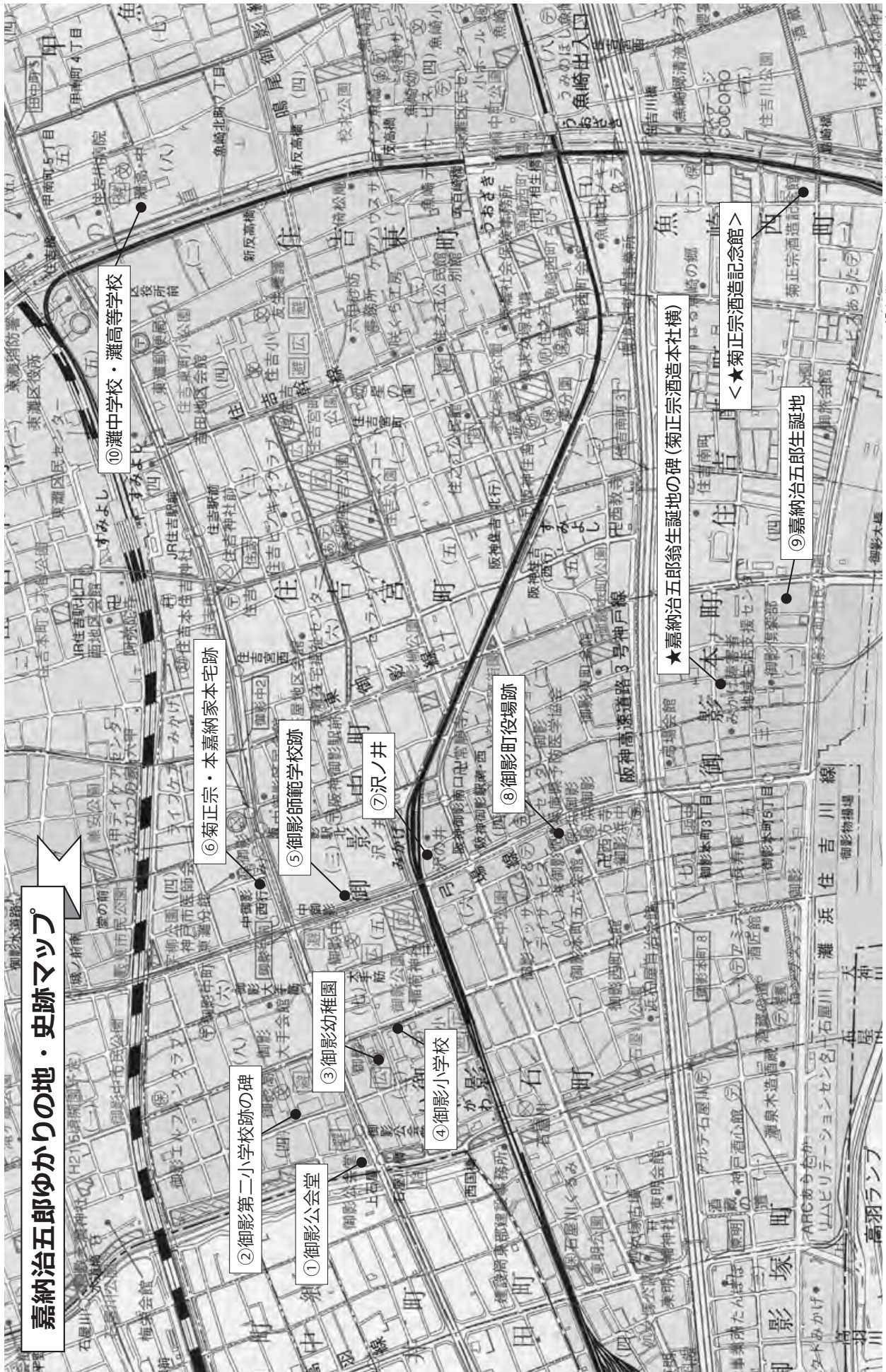
嘉納治五郎が1860年（万延元）10月28日、摂津国菟原郡御影村浜東（兵庫県武庫郡御影町御影字浜東〈現在の神戸市東灘区御影本町1丁目〉）で、父・治郎作、母・定子の三男（第五子）として誕生した場所は、現在の東灘区御影本町1丁目「第二工区入口」交差点の北西角にあたる区画で、「千帆閣」と言われた。残念ながら、現在、生誕の地には、治五郎が幼少期を過ごした邸宅をはじめ、その名残となるようなものは何も残されていない。

なお、2018年（平成30）12月20日、生誕地近くの菊正宗本社横に、「嘉納治五郎翁 生誕地」の碑が建てられた。（裏表紙参照）

⑩ 灘中学校・灘高等学校（10ページ参照）

（嘉納治五郎の銅像、生誕ゆかりの地の碑）

灘中学校は、1928年（昭和3）4月1日に開校した旧制中学校で、治五郎は同校の顧問に就任し、入学式、卒業式等に臨席、また、しばしば生徒に講演している。校内に、嘉納治五郎の銅像、生誕ゆかりの地の碑がある。



〔東灘区あんない〕<東灘区役所発行>を加工

◎ 嘉納治五郎・略年表

1860 (万延元) 1歳	・10/28 摂津国菟原郡御影村浜東で生まれる
1870 (明治3) 11歳	・父に連れられ、東京へ移る
1873 (明治6) 14歳	・育英義塾に入り、英語などを学ぶ
1875 (明治8) 16歳	・官立開成学校に入学
1877 (明治10) 18歳	・開成学校が東京帝国大学と改称、文学部に編入 ・この頃から、天神真楊流の柔術を学ぶ
1881 (明治14) 22歳	・東京帝国大学文学部を卒業、そのまま専科に進む ・起倒流柔術を学ぶ
1882 (明治15) 23歳	・学習院の講師になり、政治学などを教える ・永昌寺に、「講道館」を開く
1886 (明治19) 27歳	・学習院の教頭になる
1889 (明治22) 30歳	・約1年4か月間の行程で、欧州の視察に行く
1891 (明治24) 32歳	・竹添須磨子と結婚する ・第五高等中学校(熊本)の校長になり、単身赴任する
1893 (明治26) 34歳	・東京高等師範学校の校長になる
1902 (明治35) 43歳	・清の留学生のための学校・宏文学院をつくる
1909 (明治42) 50歳	・東洋初のIOC(国際オリンピック委員会)委員に就任。以後、東京へのオリンピック招致に尽力する
1911 (明治44) 52歳	・大日本体育協会を設立し、会長に就任
1912 (明治45) 53歳	・日本初参加のストックホルムでのオリンピックに団長として参加
1922 (大正11) 63歳	・講道館文化会を設立 ・貴族院議員になる
1927 (昭和2) 68歳	・財団法人灘育英会・灘中学校の設立認可を受け、顧問に就任
1936 (昭和11) 77歳	・ベルリンのIOC総会で第12回オリンピック大会(1940)の開催地が東京に決まる。
1938 (昭和13) 79歳	・カイロIOC総会で、オリンピックの東京開催が再確認される ・カイロから、アメリカを経由してカナダからの帰国の途中、氷川丸の船上で肺炎により亡くなる(79歳)

(御影、東灘、神戸での動向は省略した)

参考文献

*本書は、先に公表した拙稿「嘉納治五郎と東灘」(『生活文化史<史料館だより> 第46号』所収(4頁以下)、2018年3月、神戸深江生活文化史料館発行)をもとに、大幅に加筆したものである。

以下、本書を執筆するにあたってのおもな参考文献を示しておく。

- 『武庫郡誌』(1921年、武庫郡教育会編)
- 『御影町誌』(1936年、玉置敬太郎著、御影町)
- 『魚崎町誌』(1957年、魚崎町誌編纂委員会)
- 『嘉納治五郎体系 第11巻 嘉納治五郎伝』(1988年、講道館監修)
- 『嘉納治五郎体系 第13巻 年譜』(1988年、講道館監修)
- 『嘉納治五郎の生涯 柔道の歴史 1巻～6巻』(1988年、橋本一郎著、本の友社)
- 『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』(1997年、嘉納治五郎著、日本図書センター)
- 『嘉納治五郎師範に学ぶ』(2001年、村田直樹著、日本武道館)
- 『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』(2011年、生誕150周年記念出版委員会編、筑波大学出版会発行)
- 『講道館百三十年沿革史』(2012年、講道館発行)と同付録CD版収録「年表編」
- 『小学館版 学習まんが人物館 嘉納治五郎』(2018年、真田久監修、小学館)
- 『灘校のあゆみ』(2018年、灘中学校・灘高等学校)

あとがき

私が嘉納治五郎という名前を意識し始めたのは、テレビのクイズ番組がきっかけだった。中学生の時だったからもう40年以上前のことだが、「パネルクイズアタック25」(朝日放送)の海外旅行チャレンジクイズで「ある人物」を当てた映像が流れた冒頭、阪神御影駅のホームが映し出された。御影駅だと瞬間でわかったが、御影にそんな有名人がいるのかなと思ひ、答えを確認すると嘉納治五郎だった。当時、講道館柔道をはじめた人物が治五郎であるということは知っていたが、御影との関係は頭になかった。地域の歴史を学ぶようになり、研究・普及活動を行う立場になってからは、機会があるごとに治五郎と御影との関係を話すように心がけてきた。

4年前に、地域からの要請で私が監修した『続・御影町誌』の出版記念講演会で、嘉納治五郎の話題を取り上げ、地域として治五郎の功績を何も顕彰できていないと問題提起をし、彼の銅像を作成して、生誕の地に設置することを提案した。この講演を聞かれた地域の方が動いてくれ、昨年、御影公会堂の耐震工事によるリニューアル工事の完成にあわせ、地下に「嘉納治五郎記念コーナー」を設置し、治五郎関係の資料を展示するとともに、その中央には、柔道着姿の等身大の治五郎の銅像が設置されることとなった。講演で私が話したことが現実のものとなったのである。

今回、私の母校・御影小学校の創立110周年にあたり、その記念事業の一つとして、「文教の地・御影」の礎を築いた嘉納治五郎にスポットを当て、彼の没後80年という節目でもある今年、嘉納治五郎の冊子を作成しようということになり、その執筆の機会をいただくことになった。私は、10年前の100周年の際には、PTA会長として記念行事のお世話をし、以来、通算9年間PTA会長として小学校を側面から応援してきたが、今回の110周年の記念事業では、前PTA会長として本冊子の執筆を中心に記念事業に関わることができ、うれしく思っている。

本冊子を作成するにあたっては、公益財団法人講道館の全面的支援により写真等の資料提供をいただいております。その際、講道館図書資料部の本橋端奈子学芸員に大変お世話になった。また、私の長男の母校でもある灘中学校・高等学校にも、所蔵資料の提供をいただき、和田孫博校長先生にとっても親切にご対応いただいた(なお、和田先生と私は、今年8月4日、同じ日にたまたま偶然、時間差で千葉県松戸市にある治五郎の墓所を訪ねており、これも何かの縁かとお互いで確認しあった)。お二人に感謝の意を表したい。なお、本冊子を刊行するにあたっては、PTAの周年行事積立金のほか、その費用の一部を東灘区役所から援助いただいていることを付記しておく。

今は何もない生誕の地に、できるだけ早く「嘉納治五郎生誕の地」の記念碑が設置されることを願うとともに、本冊子が、御影が生んだ世界の偉人・嘉納治五郎という人物を御影の子どもたちをはじめ地域の方々に興味を持って理解していただけるための一助となれば幸いである。

平成30年9月1日

道谷 卓(姫路獨協大学副学長・神戸深江生活文化史料館副館長)

増補にあたって

もともと本冊子は、御影小学校創立110周年記念事業の一環として発行したものを東灘区役所の協力で一般の方々にも配布することにしたという経緯がある。冊子刊行後、多数のメディアに取り上げていただいたおかげで、初版があったという間に払底してしまったが、その後も、多くの方から冊子を手入したいという問い合わせが続いている。初版発行時にはなかった生誕の地を示す石碑がその後建立されたことで、東灘区役所からの要請・協力もあり、この機会に記念碑の紹介も兼ねて、増補版を発行することにした。

平成31年2月1日 道谷 卓

■ 著者紹介

道谷 卓（みちたに・たかし）

1964年（昭和39）、神戸市東灘区御影生まれ。

御影幼稚園、御影小学校、御影中学校、兵庫県立御影高等学校を経て、関西大学法学部卒業。関西大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得。

現在、姫路獨協大学副学長・人間社会学群現代法律学類（法学部）教授。専門は刑事訴訟法で、研究テーマは公訴時効制度。2010年の殺人の時効が廃止された刑訴法改正の際には、「報道ステーション」をはじめ、テレビ、ラジオ、新聞などのマスメディアにコメントが取り上げられた。その他、法務省保護司、法務省加古川学園篤志面接委員として、非行少年の矯正教育、更生保護に携わる。

そのかわり、神戸深江生活文化史料館副館長として、神戸の歴史の研究・普及活動を行っている。郷土史関係の主な著書に『日本史の中の東灘』（（財）神戸市民文化振興財団、1989年）、『ザ・ひがしなだ－東灘の歴史の足跡をたどる』（神戸深江生活文化史料館友の会、1990年）、『中央区歴史物語』（神戸市中央区、1990年）、『新・中央区歴史物語』（神戸市中央区、1996年）、『うはらの歴史再発見－ちょっと昔の東灘』（東灘復興記念事業委員会、2000年）、『神戸歴史トリップ』（神戸市中央区、2005年）、『続・御影町誌』（御影地区まちづくり協議会、2014年）など、多数。

御影が生んだ偉人 嘉納治五郎【増補版】

発行日 平成30年10月24日 初版
平成31年3月1日 増補版

著者 道谷 卓

発行 神戸市立御影小学校創立110周年記念事業実行委員会／東灘区役所
〒658-0045神戸市東灘区御影石町3-1-1（神戸市立御影小学校内）
〒658-8570神戸市東灘区住吉東町5-2-1（東灘区役所）
電話（078）841-4131（代表）

資料提供 公益財団法人講道館 灘中学校・灘高等学校

©Takashi Michitani 2018
